

京都の未来をつくる 24 時間。

京都わかもん会議

KYOTO WAKAMON CONFERENCE

京都わかもん会議実行委員会 横山 愛



夕刻、門川京都市長が会場を訪れ、若者の可能性などの話をしたあと、若者たちと熱心に意見交換をしました

「京都わかもん会議」と聴いてあなたは何を連想するだろうか。私は最初、京都で若者が集まり、堅苦しい雰囲気での机上の議論をする場だと考えていた。その考えは即、くつがえされた。

2015年2月7日、北海道から沖縄まで全国各地から「わかもん」40名が宇多野ユースホステルに集まった。

緊張した面持ちで続々とやってくるわかもんたち。何が始まるだろうと期待感を寄せているわかもんや、知り合いがいない場で不安なわかもん。多種多様なわかもんが一堂に会した。この時、白熱した議論が深夜まで続くことになる。誰が予想しただろうか。

そして正午、京都わかもん会議の舞台が開かれ

た。自己紹介などのワークを経るごとに、参加者たちの顔が緩んでいく。ゲストの講演では、教育、まちなどのテーマで議論が繰り広げられた。ゲストの話の聴きながら、わかもんたちは前のめりになる。

議論したい想いが募っていたのだ。この後の休憩で参加者同士が徐々に議論を始めていた。

夜になると外の暗さには似合わない、明るい顔をしたわかもんたちがいた。自分が取り組んでいること、これからの生き方などに対する問いを語り始めた。深夜まで議論は続いた。わかもんたちが問の答えを探す旅に出ている時間だった。

その旅から京都に立ち戻り、京都でできること、京都でやりたいことを宣言しあつた。

京都から出る、京都から連れ去りたい、京都と向き合いたいなど個性あふれる宣言ばかりだった。

今回、実行委員長 滋野正道氏が、口酸っぱく伝えていた言葉がある。

「ひとり一人が描く未来を実現するために、具体的な一歩を踏み出す場にした」だ。真剣にわかもんへ伝えようとする姿を見ると、彼自身が葛藤しているテーマだと感じた。この言葉を聴いて、わかもんたちは具体的な一歩を踏み出すヒントを持ち帰ろうとしていた。

余談になるが、実行委員のメンバーも「京都」にゆかりのある「わかもん」である。社会の課題と向き合う私たちも、何か答えを求めながら、運営していたかのように思う。日々の活動に意味があるのか。その意味とは何か。

いま、「過疎高齢」「限界集落」「人口流出」などの課題が社会を取り巻いている。

ここ京都でも同じだ。「わかもんたちだけで動いても社会は変わらないのではないか」という声があるかもしれない。でも、私たちはわかもんが立ち上げれば、社会が変わると信じている。なぜなら、社会を変えたいと思ひ、課題解決に取り組む仲間がいるからだ。

この場を機に、わかもんたちは新たな一歩を踏み出すことになる。その歩みが社会を変える一歩となるだろう。

そして、また京都で集いたい。これが次回の京都わかもん会議と参加者との約束なのかもしれない。この約束を果たすため、今も「わかもんたち」は社会と向き合い続けている。

